

フツカイチホヨウジョ

GUO LIDONG (東京大学)

1. はじめに

福岡県筑紫野市の済生会病院の敷地内に、堕胎に関わる慰霊碑がある。ここは、かつて陸軍が所管した二日市保養所と呼ばれた施設で、敗戦後の1946年春から、朝鮮人やソ連兵、中国人などによるレイプ被害に遭った日本人女性の引揚者に堕胎手術や性病の治療を行った堕胎病院となったところである。中絶が禁止されていたその時代においては、これは超法規的措置であった。そして、二日市保養所は、一定条件のもとでの人工妊娠中絶を許す優生保護法の施行にともない、1947年秋頃に閉鎖された。この引揚者のための堕胎については、関係者の間でのみ語り継がれていたが、後に触れるドキュメンタリー『引揚港・水子のうた』^{ミズコ}『引揚港・博多湾』の放送と、その関連著作『水子の譜ー引揚孤児と犯された女たちの記録』の出版にともない、社会に広く知られるようになった。このことを知った地元の高校教師の児島敬三^{コジマケイゾウ}が私費で慰霊碑を建立し、^{イレイヒ}今でも毎年5月14日に関係者も列席して慰霊祭^{イレイサイ}が行われている。

本研究では、まず、二日市保養所を語った 1970 年代末のドキュメンタリー『引揚港・水子のうた』『引揚港・博多湾』とその書籍『水子の譜ー引揚孤児と犯された女たちの記録』を研究対象として取り扱い、当時流行の兆しにあった「水子」という言葉を通して、二日市保養所をめぐる歴史が社会に提起され、その歴史の語りが社会に受容されるプロセスを検討する。それを事例とすることで、戦後日本の「敗戦」の歴史的語りにおける国家や社会、個人など諸主体のダイナミックな関係性と、その中における文化資源の利用のあり方が一層明らかになるという見通しがある。次に、二日市保養所跡地にある「^{ジン}仁の碑」と「^{ミズコジソウ}水子地蔵」の造立経緯や、「水子」のための「慰霊祭」のあり方を検討することによって、1980 年代前後の水子供養の流行とその「民俗」のポリティクスを微視的に解き明かすことが可能となろう。加えて、敗戦体験を伝えるメディアでもある二日市保養所の「水子地蔵」と「慰霊祭」の研究により、現在に至る敗戦体験の継承を描き出すことも目指す。つまり、本研究によって、「水子」の民俗学的研究のみならず、戦後日本の「敗戦」の歴史的語りの研究にも大きく寄与することができると考えられる。

2. 二日市保養所

二日市保養所は、現在の福岡県筑紫野市の済生会病院の敷地内に存在した、敗戦後の引揚者のための墮胎病院であった。この二日市保養所は、博多引揚援護局にあった在外同胞援護会救療部が運営していた。救療部の前身は、朝鮮半島在住日本人の引揚を主導した京城日本人世話会の内部に1945年10月11日に設置された移動医療局（MRU）である。敗戦と前後して、日本人避難民の増加に対応するために京城帝国大学医学部の教員・学生を中心に、京城に救護病院と各難民収容所に診療所が開設された。それとともに、引揚列車・引揚船内での医療活動を行うMRUを設置し、京城から釜山を経て博

多に至る引揚ルートに沿って医療体制が構築された¹。これらの組織構築の中心となったのが、京城帝国大学法文学部助教授で文化人類学者の泉 靖一（1915～1970）であった。救療部は博多駅に近い聖福寺境内に置かれ、聖福病院の運営と引揚船への医師や看護婦の派遣などを行っていたが、その中で、最も緊急かつ深刻な問題は、ソ連軍などによるレイプ被害に遭った、「不法妊娠」の女性の堕胎処置と性病罹患者の治療であった。

引揚者を対象とした堕胎は、引揚港という水際において混血児を「処理」することを目的として、厚生省が中心となって行政レベルで進められたものであった。そもそも当時において人工妊娠中絶は、国家の人口維持のために設けられた堕胎罪に触れる国禁の行為であり、許されるのは母体に生命の危機があるときのみであった。この引揚女性「不法妊娠」の超法規的措置による中絶については、当時は公の場において議論されていなかったが、中絶を容認した後の優生保護法の提案との間には連続性をみることができる²。

3. 水子の譜

この二日市保養所における堕胎の歴史は、関係者の間でのみ語り継がれていたが、1970年代後半、RKB毎日放送のテレビ局ディレクター上坪隆は、福岡にて「二日市保養所」を追跡取材する中で、健康番組の解説者で引揚孤児施設「聖福寮」元寮長でもあった京城帝大卒の小児科医山本良健と知り合い、その交流を通して「二日市保養所」の悲話を知った。この後上坪は、『引揚港・水子のうた』（1977年）、『引揚港・博多湾』（1978年）の2本のドキュメンタリーを制作した。上坪は、これらの作品内容を著作『水子の譜ー引揚孤児と犯された女たちの記録』として、1979年に上梓した³。

この「水子」という語は、元来生まれて間もない子を指す言葉であったが、1970年代からは「水子」を慰める水子供養の普及により人工妊娠中絶で死亡した胎児を指す言葉となった。1970年代、マスメディアなどの話題に上ることにより、この概念は広く社会に知られるようになった。現在、多くの宗教施設で行われている水子供養は、人工妊娠中絶により堕ろされた胎児の霊魂供養として始まったものである。水子供養が商業化されるようになった1970年代半ばには、すでに一般大衆の間で中絶はかなり許容され、避妊も広く普及していた。しかし、水子供養が登場した時期はマスコミが名付けた「オカルトブーム」と重なっていたため、様々な中絶の表象が映画やフィクション、新聞雑誌の相談欄などに登場し、様々な視点から中絶が表象されるようになった。当時、頻繁に水子供養を提供する寺社を記事に取り上げ、特定の霊能者の見解や儀式を紹介する週刊誌は多かった。センセーショナリズムに依存していた週刊誌であるので、胎児の祟りについては最も恐怖をそそる霊能者のお告げを掲載し、若い女性の苦しみについては最も苦悩に満ちた内容を綴ることで、週刊誌は「ぼろ儲け」することができたのである⁴。さらに、この時期は、産科医療器械の進歩により母体内の胎児が可視化された時代

¹ 加藤聖文「引揚者をめぐる境界ー忘却された「大日本帝国」」『社会の境界を生きる人びとー戦後日本の縁』岩波書店、2013年、26頁。

² 樋口恵子「引揚女性の「不法妊娠」と戦後日本の中絶自由」『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店、2018年、218頁。

³ 下川正晴『忘却の引揚げ史ー泉靖一と二日市保養所』弦書房、2017年、34頁。

⁴ ヘレン・ハーデカー『水子供養 商品としての儀式ー近代日本のジェンダー／セクシュアリティと宗教』塚原久美他訳、明石書店、2017年、136～137頁。

でもある。これらの胎児写真は、中絶した胎児を個別的で具体的な命と認識させ、堕胎は「殺人」であるという論理を視覚的に強化し、「水子」に形を与えることに明らかに寄与してきた。

話を二日市保養所に戻す。もともと、満州や朝鮮半島から博多港に向かう引き揚げ船では、レイプ被害に遭った日本人女性の引揚者に対して「不幸なるご婦人方へ至急ご注意！」という呼びかけで始まるビラが配られた。そこには、「不法な暴力と脅迫により身を傷つけられたり……そのため体に異常を感じつつある方は……」「診療所へ収容し、健全なる体として故郷へご送還するので、船医にお申し出下さい」などの旨が記されていた⁵。つまり、二日市保養所の堕胎に関わるこの最初の公的語りは、「異常」な身体を「健全」な身体たらしめるという論理と、厚生省側の「混血児処理」・「性病蔓延防止」という論理に基づいているのである。それは、フーコー的な^{セイセイジ}生政治の「正義」を主張するナショナリスティックな言説であると言える。しかし、1970年代以降流行してきた「水子」の論理は二日市保養所事件に対して、公共の場における語りの新たな可能性をもたらした。すなわち、二日市保養所における堕胎は、戦後日本の国家の「正義」といっても、やはり戦争を遂行したイデオロギーの延長にある恐ろしい殺人行為でもある。その中で、被害の女性と腹中の胎児は苦しみから解放されるどころか「二次加害」を与えられたという語りが可能となったのである。これについて、上坪はインタビューに答えて以下のように述べている。

〔前略〕「戦争は終わったとか、前を向いて歩こうとかする政治状況には、とことんからんで行きたい。戦争で犠牲になった^{タミグサ}民草が今なお傷のうずきに耐えているのに、戦争を遂行した体制は知らぬ顔で生きのび、もう済んじゃった、を決め込むのは許せない」〔中略〕『水子の譜』を執筆中、国民学校時代に耳にした「天皇陛下の赤子」という言葉がいつも頭から離れなかったそうだ。「赤子と水子——あの水子たちと私たちは紙一重でつながっていたのです。それを消し去ることはできない」⁶

この敗戦30年後の社会状況に応じて上坪が考えたのは、二日市保養所で命を落とした「水子」とその母親たちのため、生き残った人々のため、そして戦争の残酷さを知らない若者のために、「水子」の名義を借りてこの惨事を記録して残すことの必要性であったことがうかがえる。

4. 「仁の碑」と水子地蔵像

二日市保養所跡地には1981年3月、元福岡県立修猷館^{シュウユウカン}高校教師の児島敬三が私財を投じて「仁の碑」を建立した。この碑は、「今はそれぞれの家郷で平穏な日々を送っておられるであろう彼女たちが、30数年を経た今日、この地を訪れて往時の先生や看護婦さんに感謝の意を伝え」るように、「堕胎が法律で禁じられている事を知りつつ、職を賭して行った」医師や看護婦たちの「人道的」行為を顕彰するとある⁷。その碑文では、医療従事者たちの人道的行為への賛辞と謝意が込められている一方で、性被害女性や堕胎した子供への思いがみられない。この「仁の碑」が建立されたことで、翌年には済生会二日市病院によって「水子地蔵」が作られた。毎年5月14日には、その場所で慰霊祭が行われているとされている。この慰霊祭について、以下の2017年の新聞記事を参照して説明したい。

⁵ 「〔戦後・博多港引き揚げ者らの体験〕（2）医師ら、ひそかに中絶手術（連載）」『読売新聞』2006年7月27日朝刊，22面。

⁶ 「『水子の譜』を書いた上坪隆氏」『朝日新聞』1979年8月19日朝刊，12面。

⁷ 前掲，下川，32～33頁。

〔前略〕＜当時としては救ってあげたことにはなりますけれども。その時は人助けだと思って、意義あるお仕事だと思ってましたけど、考えてみると、いまではいたたまれない気持ちね……＞〔中略〕その医師や看護師たちは亡くなったり、口を閉ざしたりして、当時の状況を知る機会に限られるようになった。〔中略〕同会〔フツカイチホヨウジョ カタ ツ カイ 二日市保養所を語り継ぐ会〕は、5月の慰霊祭への参加を広く呼びかけ始めた。かつて保養所の跡地にあり、水子地蔵を建てた済生会二日市病院の関係者による慰霊祭は細々と営まれてきたが、「悲劇を繰り返さないためにも歴史を継承していく必要がある」と下川〔シモカワ マサハル 正晴〕さんは力を込める。⁸

カトウキヨフミ
加藤聖文の口述記録によれば、堕胎によって多くの女性は重荷を下ろしたかのようにいわれる一方で、病室内で水子のために毎日線香を焚いたり、夜な夜な赤子の幻聴に悩まされる女性もいたという証言があった⁹。理不尽な暴力に遭った女性が精神的に衝撃を受け、常軌を逸した状態に陥っているかのようなシーンを目撃した医師や看護師たちも、ある程度のトラウマを受けていた。しかし、元来の国家の生政治的な論理のもとでは当事者以外にとって理解しがたいこれらの体験は、経験者によってのみ私的に語り継がれていたが、水子地蔵の建立が、経験者たちの「水子」の慰霊祭への参加を促し、それによって苦しい記憶の共有を可能とするプラットフォームが用意され、それを通して解放・救済が目指されたのだろうと考えられる。

5. おわりに

二日市保養所をめぐる歴史は、もともと国家の生政治的な言説の支配のもとでは、ただ経験者によってのみ私的に語り継がれていた。しかし、1970年代の「水子供養」の風潮に乗じて二日市保養所に関わるドキュメンタリーと著作が上坪に押し出されたことで、これら理不尽な暴力に遭った女性らの異常な振舞や、医師や看護師らのトラウマへの理解に対しては社会的基盤がつくられ、封じ込められた過去もそれから蘇ってきた。1981年に建てられた「仁の碑」はまだ国家倫理における「人道」への顕彰に留まっているが、その後の「水子地蔵」造立とその「慰霊祭」の動きこそは、「水子供養」という新たな「民俗」を通して二日市保養所の経験者への救済の試みであった。さらに、「水子」への慰霊の場を通じてこの歴史的語りは経験者に留まらず、戦後直後の激動の時代を経験していない世代にも共有することができるのではないだろうかと考えられる。

参考文献

- 鈴木由利子(2021)『選択される命ー子どもの誕生をめぐる民俗』臨川書店。
樋口恵子(2018)「引揚女性の「不法妊娠」と戦後日本の中絶自由」『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店。
ヘレン・ハーデカー、塚原久美他訳(2017)『水子供養 商品としての儀式ー近代日本のジェンダー／セクシュアリティと宗教』明石書店。
下川正晴(2017)『忘却の引揚げ史ー泉靖一と二日市保養所』弦書房。
加藤聖文(2013)「引揚者をめぐる境界ー忘却された「大日本帝国」」『社会の境界を生きる人びとー戦後日本の縁』岩波書店。
森栗茂一(1995)「水子供養の発生と現状」『国立歴史民俗博物館研究報告』57。

⁸ 「[むかし探訪] 1946年3月25日 二日市保養所開設＝福岡」『読売新聞』2017年8月28日朝刊, 27面。

⁹ 前掲, 加藤, 31頁。